

夏堀正元

風来の人

小説・高田保

夏堀正元

風来の人小説・高田保

夏堀正元（なつぼり まさもと）
大正14年、北海道小樽市に生まる。
早稲田大学文学部中退。

主な著書
「北の墓標」文藝春秋
「青年の階段」中央公論社
「海猫の襲う日」新潮社
「鎖の園」新潮社
「北に燃える」講談社
「海鳴りの街」講談社
「無冠の旗」河出書房

風来の人小説・高田保

昭和五十四年十月十日 第一刷

1000円

著者 夏堀正元

発行者 杉村友一

発行所 株式会社文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町三

印刷 理想社印刷
付物印刷 凸版印刷
製本 和田製本

万一落し乱丁の場合はお取替いたします

風来の人

小説・高田保

装幀 栗屋 充

初出誌
別冊文藝春秋 147号
148号
一九七九年三月
六月

わたしの勤めていた地方新聞に短い原稿をもらうため、はじめて高田保に会ったのは、朝鮮戦争が突発してまもない昭和二十五年（一九五〇）の秋のことである。そのころ、高田は大磯にある島崎藤村の旧宅を借りていて、宿痼の肺結核と闘いながら随想『ブラリひょうたん』を夕刊紙の東京日日新聞（毎日新聞系）に執筆、軽妙洒脱な達意のユーモアと暖かい人間愛のうちに、ときに真率で鋭い、ときにやんわりと屈折した皮肉な文明批評を展開して、高い世評を得ていた。わたしのような駆けだし同様の若い新聞記者にとっては、高田保は近よりがたい憧れのまことのごとき存在だったのである。

だが、ごみごみした露地裏に訪ねあてたその家は、文豪終焉の家とは思えないくらい貧弱で、高田が嫌いっづけていたおなじ大磯のワンマン宰相吉田茂の大邸宅とは、およそ好対照であった。わたしはなんとなくほっとした気持で、風雨に晒された玄関の戸をガタピシ開けたのを覚えてい

る。

わたしがとおされたのは、おびただしい本や雑誌が乱雑に放りだされている小部屋だったが、当時の高田保は、画人であり医学博士である友人の宮田重雄がレントゲン写真をみて、「高田には肺がない。あれでよく生きられるものだ」と呆れたほど、両肺がすっかり冒されており、その痩せた顔は土気色をしていた。油っけのない頭髮は乱れ、不精髭が目立ち、中学生時代にキャメルを嚙んで欠けたとき以来、齒医者にみせたことがないという歯は、ところどころ欠け落ちて、煙草のやにで黒く汚れた味噌っ歯になっている。そのうえ、齒槽膿漏を治療もせずに放っておいたため、顎のあたりにえぐられたような、一見笑くぼにもみえる古い傷痕がある。また、左眼がしらや左頬に大きなイボがあつて、それが表情にアクセントをつくりだしている。——そうした風貌が、どてらを着こんでわたしのまえに坐つた彼をどこか隠者めかせ、五十五歳の年齢よりはるかに老人くさくみせていた。

それでも、大正なかば浅草オペラに熱中したダンディなペラゴロ時代や、「雲隠れの名人の高田を探すには、銀座をぶらついてりゃいい。どこかの露地でかならず見つかる」といわれたほど銀座に入り浸つた昭和初年代のモダンボーイを想わせるものが、優しく柔らかな眼差しをはじめ、ちよつとした甘さのよぎる表情や、どこことなくはずみのついた物腰のはしばしに、ひょいと残っている感じであつた。とりわけ、聡明だがいたずらっぽい眼つきの奥に漂っている、なにやら虚無的な不断の笑いの翳が、わたしには印象的だった。

その笑いは、人懐っこさをみせているようでいて、むしろ臆病なくらいに、自分を外界から遮

断する役目も果しているようであった。曲者だな、この笑顔は、とわたしは思い、高田保のしたたかさは、ときおりちらりとみせる不敵に開き直った表情よりも、柔らかな笑顔のほうにあるようだ、と感じていた。

わたしは『ブラリひょうたん』の名声にたどりつくまでの高田保の半生は、ズボラな漂泊と、挫折と、酬われることの少ない賭けをたえずくりかえしてきた、と聞かされていた。ペラゴロにはじまり、戯作者、プロレタリア演劇人、転向者、小説家、新聞記者、軽評論家と、激動期の大正・昭和と渡り歩いた末に、なにごとく大成せず、市井のなかに自己^{うちかみ}顕晦^{けんかい}した皮肉屋である、というのがおおよそその予備知識であった。

じっさい会ってみると、その味わい深い顔には、ダンディな蕩児がもっている享樂者^{エビエリヤン}の哀しみといった、甘美な退廃と屈折が滲みでており、その蔭から、旺盛な野次馬根性の余燼^{よじん}がくすぶっているいたずらっ子の表情がのぞいていた。しかし、ふとしたはずみに、それらとはまったく異質な、ストイックなまでに抑制された繊細なきびさが、魁偉な面上に浮んだ。わたしが高田に世のエリートや権力を奥深く揶揄する反骨の意思があると感じたのは、そうしたときであった。とはいえ、全体にはそらとぼけた雰囲気をつぶりと漂わせ、それを不透明な壁にして他人の視線をはねかえすように、素顔を隠しているのだから、本心をとらえにくい点では、たしかに始末のわるい顔であった。それはひとくちにいうと、日本のインテリのある部分を代表する顔だったのである。

その高田がいま、文字どおり血を吐きながら『ブラリひょうたん』に精魂を傾けている。わた

しの原稿依頼は軽く一蹴されるところだ。が、案に相違して、執筆をひきうけてくれ、億劫そうに茶をいれてくれながら、背中を壁にもたせかけて、初対面のわたしに小一時間ばかり話を聞かせてくれた。

もう随分古いむかしのことで、残念ながらその話はほとんど忘れてしまったが、帰りがけに眼の奥の笑いを消して、ふっと洩らしたことは、いつまでも忘れかねた。

「きみ、ぼくは道草ばかり食って生きてきたが、これからは無駄のできないぎすぎすした世のなかになるね」

わたしは時雨しぐれもよいの道で大磯駅にむかって歩きながら、そのことばにどうしようもないいらだちを覚えていた。老人の——あるいは病人の繰り言だと思っただけではない。二十五歳だった若いわたしには、日本の隅々までをきつく緊めつけていた占領時代がまもなく終り、朝鮮半島にも平和が甦れば、戦時中から冀願きがんしてきたほんとうの〈自由〉を手中にすることができるといふ熾烈な思いがあった。それは（いまこんなふうにはいくぶん恥ずかしいが）胸にたぎる真摯な希望であり、さらには確信ともなっていた。だから、「ぎすぎすした世のなか」ということばからくる暗くて窮屈な時代のイメージは、受け入れられなかったのである。

けれども、「道草ばかり食ってきた」という高田のことばには、あらがいがたい重さと哀しみがあつて、わたしの心の壁ひだに食いこんできたのも事実だった。——すると、高田保は、彼の生涯にはじめての輝かしい安定した名声をもたらした『ブラリひょうたん』をも、あえて『道草』だったといおうとしたのだろうか……。

その答えは、当時のわたしにはでなかった。わたしはいくぶん混乱しながら、いつのまにか降りだした時雨に足を早めていた。

浅草オペラ全盛期の金龍館には、楽屋口を入つてすぐに「頭取室」とよばれる畳敷きの小部屋があり、そこにはいつも、顔の皺のなかまで白粉^{おしろい}灼けた歌舞伎の下ツ端役者あがりの瘦せた老人が、背中を丸くして坐っていた。大正なかばに忽然と生れたオペラなどという新奇な世界では、まったく場違いの老人は、頭取といういかめしい名称をもつていても、楽屋に出入りする者を見るだけの、忘れられた影のような存在であつた。

浅草奥山の芝居小屋を手広く経営している根岸興行の文芸部に、一応籍をおいていた二十代なかばの高田保は、傘下の金龍館には出入り自由で、その佻しい影のような老人とも親しかった。

「若^わえうちは、うんと野放^{おはな}図なことをやって、早く卒業するこつたな」

ふだんから口数の少ない陰気な老人だったが、高田には皺につつまれた小さな眼の奥で薄く笑つて、ぼつりと、そんなことをいうことがあつた。

いまと違つて、楽屋には幹部の部屋があるわけではなく、大きな部屋に男女の役者が雑居していた。とくに遊びざかりの若い連中の多くは、間借りの家賃を節約するため、その大部屋で気楽に寝泊りしていた。当然、男女入り混つての雑魚寝ということになり、風紀は乱れがちだったが、劇団の人びとはおおらかで、あまりうるさく小言をいう者はなかった。

だが、雑魚寝だからかえつて女に手をだせないこともある。ろくに収入がなくて、ほとんど金

龍館に転がりこんでいた高田もそうで、外で仲間と話しこんで遅くやってきたときなどは、見知らぬコーラスガールの白粉と汗の混りあった妙な臭いのするせんべい蒲団にもぐりこんで、なにもしないまま眠ったこともしばしばであった。

もっとも、深夜眼を覚ましたりすると、隅のほうでひそひそと睦言をかわしていた男女が、やがて静かに交わっていき、女のおさえきれない声のなまめかしさが、高田を寝かせつけないこともあった。

なかには今東光やサトウハチローのように、夜遅くおめあてのコーラスガールや女優の寢床へ忍んでくる、大胆不敵なペラゴロもいた。腕力にも自信のある彼らはあちこちの劇場の楽屋を渡り歩いて、用心棒や相談役を買ってでて顔役になり、人手がたりないときは通行人のような端役で舞台にあがったりして、結構重宝がられていたのである。

ペラゴロというのは、大正なかば浅草オペラのモダンイズムにとり憑かれて、劇場に通いつめたり、オペラ女優の尻を追いまわしたりした若者をさす造語で、一般的には退廃したモダンボーイを意味していた。高田自身のことばによれば、「人生落伍浮浪の徒」で、夜を昼とし昼を夜とする放埒のなかに青春を過しているものたちであったが、浅草ではそうした若者の勲章として使われた魅力的な流行語だったのである。

ペラゴロのなかには、かなりの数にのぼる気鋭の作家や芸術家や思想家がいた。社会主義作家の金子洋文は黒っぽい道行きに土耳古帽トルコといった姿で、金龍館の楽屋に出入りし、ときにはオペラ台本を書いたりして、おなじようなことをしている高田保と知り合って親しくなった。

佐藤春夫は一文なしの二十二、三歳のときから得意になって愛用している黒の山高帽子をかぶって、相変らず尊大なもつともらしい顔をして闊歩していたし、洒落者の谷崎潤一郎は、黒っぽいお召を着流し、雪駄をちゃらりと鳴らして通ってきた。

詩人でフランス文学者の佐藤惣之助や、のちにグダイストとなった辻潤は、たんなるペラゴロではあきたらず、たまにはいっぱしの役者に扮して、堂々(?)の演技を舞台で披露していたし、ペラゴロ仲間で第一等のダンディズムを競いあっている東郷青児と武林無想庵は、それぞれ近くに迫ったパリ留学の話を昂ぶった口調でまくしたてては、高田たち周囲の者を大いに羨しがらせていた。

格別の変わり種は、アナキストの傑物大杉栄であった。大胆なフリーラヴの提唱者として知られた大杉は、その入り組んだ女性関係の多彩さで、人びとを驚かせていた。同志である堺利彦の義妹にあたる堀保子を妻としながら、東京日日新聞(この場合は毎日新聞の前身)の記者でアナキズムに共鳴していた神近市子と恋愛し、そのうえ辻潤の妻の伊藤野枝とも関係して、浅草通いをするようになったそのころは辻と別れた野枝と同棲していたのである。

その間に、大正五年(一九一六)秋には伊藤野枝、神近市子と一緒に泊った葉山の日蔭茶屋で、野枝が東京へ帰った翌晩、嫉妬にかられた神近市子に咽喉を刺されるという事件をひきおこした。これは新聞に大きく書きたてられたから、高田はむろんペラゴロたちはみな知っていて、大杉はその点でも人気者であった。噂では、葉山へ遊びにいった金は、大杉に好意をよせていたのちの東京市長後藤新平からもらったらしいが、そのことが大杉の型破りの魅力をいっそう浮きあがら

せていた。

浅草オペラの生みの親である伊庭孝とは以前から親しい大杉は、金龍館の楽屋にちょいちょい出入りしていたが、この無政府主義者にはきまって象潟署きさかたの刑事が尾行してきた。刑事たちはたいてい三人で、大杉がでてくるまで楽屋口で花札をひいているのを、高田は何度か見かけたものである。

愉快なのは、素寒貧の大杉が楽屋にもちこんだ酒やコロツケの代金まで、刑事たちに払わせていることだった。

「文なしのおれを尾行つる以上、多少の金にかかるぜ」

と大杉は、しぶい顔で財布から硬貨をだしている刑事たちを横目に、にやりと笑い、

「すまん」

といい捨てると、楽屋口から悠然と歩み去り、そのあとを刑事たちがぶつくさいいながら追いかけていった。

「さすがに大物だな……」

高田は啞然として見送り、それほど美男でもない大杉が女にもてるのは、刑事に金を払わせるあの氣迫だな、と思った。

高田保が入り浸っていた金龍館の文芸部では、流行はやりのルパシカを着た伊庭孝、佐々紅華、奥山貞吉、竹内平吉らが、たえず大声でわめくように芸術論を戦わせたり、ロシア革命について半可

知識をふりまわしながら論じあっていた。そこは活気に溢れていて、すぐ向い側にある頭取室の忘れられた影のような元歌舞伎役者の老人の存在とは、まことに対照的であった。

俳優たちの集っている大部屋でも、クロボトキンがどうの、バクーニンがどうのと、およそ役者らしからぬ議論が華を咲かせており、そこへ話好きの高田が野次馬となつて加わると、いっそう賑やかになった。

「おまえさんも、なんにでも口をだす男だね。野放図はいいが、おつちよこちよいはいけねえな。ロシア病なんて、おつちよこちよいのかかる病いよ」

あるとき、楽屋口で高田をよびとめた頭取の老人は、日露戦争当時のことでも思いだしたのか、白粉灼けのした顔に、思わぬいかめしさをみせていった。高田はそのことばに老人の好意を感じたものの、おつちよこちよい呼ばわりは心外だった。ロシア熱は金龍館の人びとばかりか、多くのペラゴロにとり憑いていたのである。じっさい、ゴリーキーの『どん底』を公演したときの金龍館の楽屋は、ちよいとした気違い部落になった。なにしろ、顔にはドーランを塗りたくり、つけ髭をつけ、夜遅くまで登場人物の扮装のまま、その役になりきった気持でうっとりしているのだ。高田がついくだらぬ世間話などもちかけようものなら、

「おい！ 日本人みたいなことをいうな！」

と怒鳴りつけられるのがおちであった。はじめは一瞬、なんのことかわからず怪訝な気持でいると、『男爵』に扮した詩人の佐藤惣之助が、端正な顔でまじめくさっていた。

「保っちゃんよ、ぼくらはみなロシア人になりきったつもりで、クロボトキンやゴリーキーを論

じ、革命について語りあっているんだ。そして互いの演技についても、ロシア人の気持で高邁な批評をしているのさ。だから、せっかくの気分には水を差さんで欲しいね」

すると、その横から『役者』に扮したピアニストの沢田柳吉が、細いつくり声で台詞めかしていった。

「雰囲気、つまりアトモスフェアを大切にしろ、これが芝居づくりの合言葉だってことは、きみもよくご承知でやしよう。だったら、身も心もロシア人の役者に変身しているはずの大切なアトモスフェアを壊すやつは、ぼくらの芝居の敵となるんでやすよ」

「なるほど……。これは気がつかないですみませんでした。みなさんはゴーストの原作よりも、もっと原作的だといえるほどに氣違ひじみていて、まさしく『どん底』的世界をここに現出しています。いや、感服いたしました」

高田は彼らの氣迫に押されながらも、皮肉っぽく応じたが、相手はそれを賞めことばとうけとったらしかった。

「そうでしょう、あんたもそう思うでしょう、保っちゃん。ぼくらはみな精魂をこめて、ぼくら自身の『どん底』を創ろうとしているんですよ。わかってくれますか」

と、得意げに叫ぶようにいったのが、『錠前屋』に扮した奇文家(?)の小生夢坊であった。ずっとあとのことになるが、小生夢坊は戦後、湘南で農園を経営するかたわら社会事業をやり、推されて公安委員となり、さらに転じて民俗芸能を守る運動をつづけた人物である。

高田は小生夢坊のことばにうなずきながら、すんでのところどとびだしそうになったつぎのこ

とばを、あわてて呑みこんでいた。

——あなた方の度胸や情熱はたいへん立派です。しかし、未熟な演技をふりかざす舞台よりも、むしろ楽屋にいるほうが、はるかに『どん底』的世界を創りだしているではありませんか。

じじつ、楽屋には虚実の交錯した妖しい世界の創造があった。けれども、やがて彼らもドーラ・ン化粧を落し、衣裳を脱いで自前の姿に戻らなければならないときがきた。が、『巡礼』に扮した小柄な役者だけが、いつまでも扮装のまままでいたのである。

「おい、そろそろ帰ろうや。芝居はまた明日だ」

と佐藤惣之助が声をかけた。すると、巡礼役者はゆっくりともの憂そうに顔をむけた。

「今夜はもう、辻潤に扮装するのなんか、おれは嫌だよ！」

いいながら長い顎鬚をはずし、かたわらの汚い布でつるりとドーランを拭きとった顔は、まさに高田が畏敬していた浅草生れの放浪の哲人辻潤であった。

辻潤の家は蔵前の富裕な廻米問屋だったが、父親の死によって急速に没落し、彼は中学にもいけなかった。そのため独学で英語を習得し、十七、八歳のころは私塾や小学校の教員をして、母と妹を養った。その後、二十五歳のときに私立上野高女の英語教師となったが、このときの教え子に伊藤野枝がいた。野枝は上野高女を卒業すると九州の郷里に帰り、学資をだしてくれていた許婚者と結婚することになっていた。だが、それを嫌ってふたたび上京した彼女は、色白の美青年で、気の優しい江戸っ子の辻の許へとびこんできて、押しかけ女房となったのである。この結果、辻は偏狭な道德観をもつ学校当局と父兄から非難されて、退職せざるをえなくなった。